

論説

齊国始封地考

——中国山東省蘇埠屯遺跡の性格——

黄川田 修

第一節 はじめに

中国五嶽の一つ泰山は、華北から東方の海へと突き出ている山東半島の根元に聳える高峰である。その東方には魯山・沂山などの海拔一〇〇〇m以上の山が連なっている。これらの山脈の北方から東方にかけての平野部を根拠地として、西周時代から戦国時代にかけて「齊」と呼ばれる国が存在した。『史記』『春秋左氏伝』等の古文獻は、前七世紀、齊の桓公が華北の諸侯を会盟に召集し「覇者」となったこと、そして戦国時代には齊の国都、臨淄に各地から様々な人材が集まり、これら「稷下之士」の中から古代中国を代表する思想家を輩出したことを記している。これらの記述は、東周時代の齊が古代中国世界の強国の一つとして重要な位置を占めていたことを伝えている。

この齊という国はどのような過程を経て成立したのであるか。建国期の齊について『史記』齊太公世家は以下

のように述べている。

於是武王已平商而王天下、封師尚父於齊營丘。(中略)萊侯來伐、與之爭。營丘邊萊。萊人、夷。

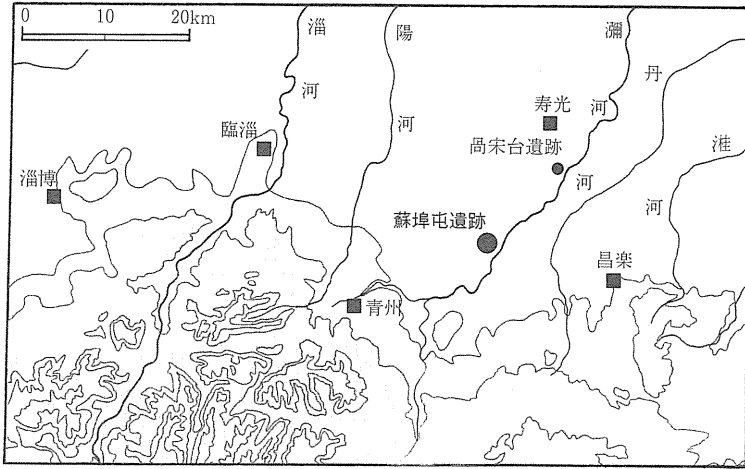
これらの記述は、所謂「克殷」(前一〇二三年頃)⁽¹⁾の直後、齊の初代の国君、太公望(師尚父)が營丘という地に国都を置いたこと、そして建国当初の齊は萊という土着の集団と争つたことを伝えている。齊太公世家はさらに左記のように述べている。

蓋太公之卒百有餘年、子丁公呂伋立。丁公卒、子乙公得立。乙公卒、子癸公慈母立。癸公卒、子哀公不辰立。

哀公時、紀侯讒之、周烹哀公而立其弟靜、是爲胡公。胡公徙都薄姑、而當周夷王之時。哀公同母少弟山怨胡公、乃與其黨率營丘人襲攻殺胡公而自立、是爲獻公。獻公元年、盡逐胡公子、因徙薄姑都、治臨菑。

この記述は、初代の太公望が長逝した後⁽²⁾、丁公・乙公・癸公・哀公の五代にわたつて齊が營丘に国都を置いたことを伝えている。また、周の夷王(在位：前八六三―八五四年頃)の治世時、胡公が「營丘」から「薄姑」に遷都し、更に獻公の時に「薄姑」から「臨菑」へと遷都したこと、そして哀公と胡公が在世中に殺害されるなど⁽³⁾、西周時代の齊の国情が決して安定していなかったことがうかがえる。

それでは、齊太公望世家が伝える營丘・薄姑・臨菑は、それぞれ現在のどの場所に存在したのだろうか。臨菑を現在の山東省淄博市臨淄区の齊国故城遺跡群と見なすことについては、一九四〇年代に関野雄氏が指摘して以来既に学界の定説となっている⁽⁴⁾。しかしながら拙論で述べたように⁽⁵⁾、營丘・薄姑については漢代以来さまざまな説が提示されたが、現在に至るも諸家の見解は一致していない。両者のうち、特に前者の營丘は上述の如く太公望以来六



図一 蘇埠屯遺跡周辺の地形図
(網かけ部分は500feet以上を示す。)

代の齊侯が約一六〇年の長期にわたって経営した国都であり、⁽⁶⁾建国期の齊を考える上で重要な都邑である。したがって營丘の所在地の究明は、齊の成立過程を考察する上で重要な課題であるように思われる。

近年、張学海氏は寿光市郊外の高宋台遺跡(図一参照)の調査成果の概略を紹介し⁽⁷⁾、この遺跡の年代が殷末―西周であり、その総面積が約八〇万平米と、淄河流域から瀾河流域一帯の殷周期の遺跡としては出色の規模であることを根拠として、この高宋台遺跡こそ營丘であると主張した。⁽⁸⁾拙稿で述べたように、⁽⁹⁾古文獻が記す營丘の候補地は現在の營丘および昌樂の近辺に存在するが、前者は淄河流域、後者は瀾河流域に位置している。⁽¹⁰⁾したがって、両流域の殷周期の遺跡に焦点を絞り分析を試みた点において、張氏の試みは妥当であるように思われる。

近年、筆者は張学海氏と同様に淄河流域から瀾河流域一帯のいずれかに營丘が存在したと仮定し、その仮説を裏付ける

資料を求めて当該地域の殷周期の諸遺跡を分析してきた。そして尙宋台遺跡の南約一kmに位置する、これまでの定説では殷代末期頃とされてきた青州蘇埠屯遺跡(図一参照)の土壙墓群が、現時点でもっとも有力な西周前期頃の齊侯墓地の候補である、という結論に達した。もしも筆者の仮説が妥当であるならば、今後は營丘の所在地についてより具体的な考察を進めることが可能となろう。

次節以降、筆者は蘇埠屯遺跡が西周前期頃の齊侯墓地の有力な候補地である、という仮説を検証するという目的に基づき、同遺跡の成立の背景について、以下の順序で検討を進める。まず第二節では本遺跡の立地と遺物・遺構の概要、調査の概略を述べ、第三節では本遺跡の年代をめぐる諸家の見解を整理する。そして第四節では出土遺物の検討を通じて各遺構の年代を可能な限り具体的に推定する。第五節では遺物・遺構の特徴を通して本遺跡を造営した人々と中原の王朝の関係を検討し、第五節では本稿での諸考察の結論をまとめつつ、本遺跡と營丘の関連について筆者の推論を提示したい。

第二節 蘇埠屯遺跡の概要

蘇埠屯遺跡は瀋河西岸、青州市蘇埠屯村の東に位置する。一九三一年四月、本遺跡の一角で農作業中偶然に大量の青銅器・土器が発見され、⁽¹¹⁾本遺跡は広く世に知られるようになった。⁽¹²⁾残念なことに、発見当時は本遺跡に対する科学的な調査は実施されなかったが、出土遺物の一部については中央研究院歴史語言研究所の祁延霈氏、齊魯大学のメンジース(J. M. MENZIES 明義士)氏とドレイク(F. S. DRAKE 林仰山)氏によって調査が行われている。⁽¹³⁾人

民共和国成立後、一九六六年に山東省博物館、一九八六年に山東省文物考古研究所等によって発掘調査が実施され、遺跡の概要が明らかになった。

現在、蘇埠屯遺跡は南北二つの丘にまたがって分布しており、一九八六年当時の段階で北側の丘（以下北丘と呼称）は南北約一〇〇m・東西約九〇m、南側丘（以下「南丘」と呼称）は南北約八〇m・東西約七〇mであった。⁽¹⁵⁾ 実はこれら両者は本来存在した大きな丘陵が長年にわたる農民の土採りによって南北に分断され、形成されたものである。「山東益都蘇埠屯第一号奴隸殉葬墓」⁽¹⁶⁾ 掲載の遺跡地形図に記された、南丘・北丘それぞれの等高線の特徴に依拠すれば、本来存在した丘陵は直径二〇〇m以上であったことが推定できる。現在まで本遺跡で発見された遺構は、少数の漢墓を除き、そのほとんどが殷周時代の土壙墓であり、後者の総数は一〇基に達する。加えて、後述するように一九三一年四月および同九月にそれぞれ出土した一括遺物群もまた、それぞれ土壙墓の副葬品と考えられる。⁽¹⁷⁾ 本遺跡が早くから破壊が進行し、多数の遺構が一九三〇年代以前に消滅していた可能性が高いことを考慮すれば、少なくとも本遺跡には殷周期土壙墓が一二基以上存在したと考えられる。また、土壙墓の他に殷周期の車馬坑が一基確認されている。⁽¹⁸⁾ 残念ながらこれらの遺構の中で、科学的な調査が行われた未盗掘墓は七号墓および八号墓の二基だけであった。両者からは大量の青銅器・玉器・土器等が出土しており、第四節で述べるように、本遺跡の年代・性格を考える上でこれらの遺物はきわめて重要である。

右に述べた殷周期の諸遺構中最大の規模を持つのは、北丘南端に位置する一号大墓である。発掘機関の報告によれば、⁽¹⁹⁾ 本遺構は深さ八・二五m・南北長一五m・東西長一〇・七mの方形の墓室を中心とし、この墓室を中心とし

て東西南北の四方向に墓道が伸びており、南側墓道残存部南端から北側墓道先端までの長さは約四八mである。周知のように、中国考古学ではこのような墓はその平面形が「亜」字に似ているため、「亜字形墓」と呼ばれる。

上述のように一号大墓は北丘南端に位置しているが、この位置は本来存在した丘陵頂上部のほぼ中心に相当するだろう。また具体的位置が公表されている、他の比較的小型の九基の墓は、北丘・南丘それぞれの上の全体に点在している。したがって墓地造営当時の蘇埠屯遺跡は、丘の頂上中央部に墓地全体の中心的施設として一号大墓が造られ、他の土壙墓群は一号大墓を取り囲むように造られていたと推定できる。⁽²⁰⁾

第三節 蘇埠屯遺跡に対する諸家の年代観

本節では蘇埠屯遺跡の年代を再検討するための基礎的作業として、過去の諸研究が本遺跡について想定した年代を概観する。

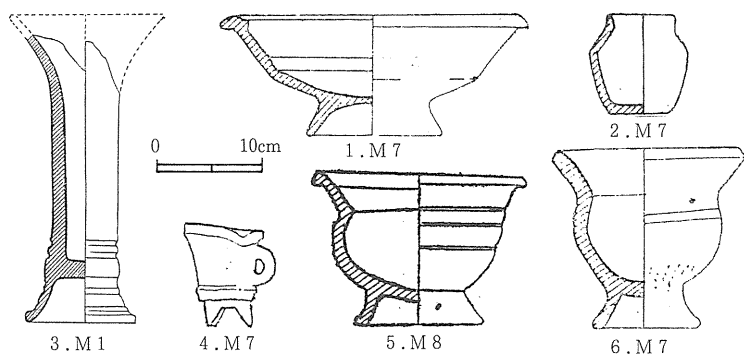
今日まで本遺跡について言及した論考の多くはその年代を殷代としている。管見では、「殷代説」を最初に主張したのはドレイク氏である。ドレイク氏は一九三二年に蘇埠屯遺跡で自身が収集した土器⁽²¹⁾を分析し、これらが安陽殷墟で出土した土器と同じ特徴を持つことから、本遺跡の年代を殷代と推定した。⁽²²⁾日中戦争終了から今日まで多数の論考が本遺跡を取り上げているが、それらのほとんどはドレイク氏と同じくその年代を殷代と推定している。⁽²³⁾人民共和国成立後に本遺跡の発掘を担当した機関もまた、本遺跡の年代を殷墟Ⅲ・Ⅳ期と報告しており、⁽²⁴⁾現在学界では蘇埠屯遺跡を殷代遺存と見なすのが定説となつて⁽²⁵⁾いる。

この「殷代説」とは別に、既に早くから数人の論者が蘇埠屯遺跡の年代が西周時代に下る可能性を主張している。衛聚賢氏は『中国考古学史』の中で、一九三一年末—三二年頃、北平（現・北京）の新聞『晨报』上で王献唐氏が本遺跡の青銅器群が「周器」、つまり殷王朝滅亡後の青銅器であると述べたことを紹介している。⁽²⁶⁾ また、郭宝鈞氏は一九七一年に脱稿した『商周青銅器群綜合研究』の中で、本遺跡から一九三一年に二次にわたって出土した青銅器群を取り上げ、四月出土の青銅器群の年代は殷代であり、九月出土の青銅器群（図六の一・二等）のそれは西周時代であると主張した。⁽²⁷⁾ 近年では、ローソン（J. RAWSON）女史が、蘇埠屯の墓地在「周」の人々のものではないことを強調しつつも、その年代が《殷代から周代への過渡期（span the Shang-Zhou transition）》に相当すると述べている。⁽²⁸⁾

上述のように蘇埠屯遺跡の年代をめぐることは、殷代とする意見が定説として流布する一方で、下限年代を西周時代とする意見も少数ながら存在する。次節では上述の諸見解を踏まえた上で、蘇埠屯遺跡の年代に対する再検討を進めていきたい。

第四節 蘇埠屯遺跡の年代

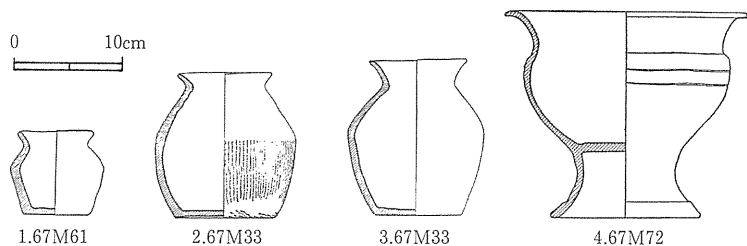
本稿第二節で触れたように、本遺跡では一〇基の土壙墓と一基の車馬坑、そして土壙墓の可能性が高い二基の器物坑が発見されており、これらの多くから多数の青銅器・土器などが出土している。本節では本遺跡の出土遺物を検討し、その検討結果に依拠して本遺跡の年代を推定する。



図二 蘇埠屯遺跡出土の土器群

土器の諸問題 最初に土器について検討を加える。図二に示したのは、蘇埠屯遺跡から出土した土器群の中から、筆者が任意で選び出した資料である。これらの内、一・二・四・六は七号墓、三は一号大墓、五は八号墓から出土している。後述するように、筆者はこれらの土器群を型式学的な特徴に依拠して「殷系」「周系」の二種に分類した。⁽²⁹⁾以下では、これらの土器群を概観する。

最初に、「殷系」土器群について述べる。図二の一・三・四・五が、筆者が殷系に分類した土器である。陶觚(図二の三)は脚部が短く、口縁は大きく開いている。陶爵(図二の四)は把手を有し、短い三脚を持つ。陶簋(図二の五)は圈足が比較的短く、腹部が外に張り出し、口縁は大きく開いている。陶盤(図二の一)は圈足が比較的短く、容器部が浅めである。これらと同様の特徴を持つ殷末頃の土器が、周知のように安陽殷墟で多数出土している。紙数の都合上図版は割愛するが、図二の一・三・四・五それぞれに近似する殷墟出土資料として大司空村一一五号墓出土陶盤⁽³⁰⁾、孝民屯六号墓出土陶觚⁽³¹⁾、大司空村三〇一号墓出土陶爵⁽³²⁾、小屯西地二三四号墓出土陶簋⁽³³⁾を挙げておく。管見では、蘇埠屯出土の土器群のほとんどは上述の



図三 陕西省長安張家坡遺跡副葬土器 [1：西周中期、2-4：西周前期]

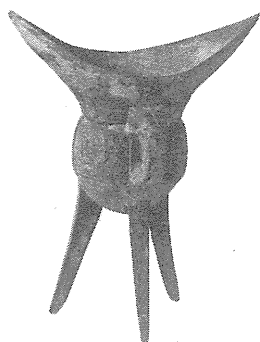
ような殷系土器で占められている。

次に本遺跡出土の「周系」土器について述べる。七号墓出土の小型の陶罐（図二の二）は、やや角張った肩部を持ち、口縁は小さめである。西江清高氏が述べているように⁽³⁴⁾、このような側視形の小型陶罐は殷末—西周中期ころの渭河流域で多数出土している（図三の一—三）。また、これら渭河流域の小型陶罐の多くは蘇埠屯七号墓出土品（図二の二）と同様、素面である（図三の一・三）。このような素面の小型陶罐は殷墟では発見されておらず、したがって図二の二は周系土器である可能性が高い。同じく本遺跡三号墓から出土した陶簋（図二の六）は高めの圈足を持ち、腹部は外に張り出し、口縁は大きく外に開いている。また腹部表面を二本の沈線が廻っている。このような特徴を持つ陶簋は殷墟ではほとんど出土しておらず、むしろ殷末—西周前期ころの渭河流域で多数出土している（図三の四）。したがって図二の二もまた周系土器である可能性が高い。

上述の諸考察を総合すれば、蘇埠屯遺跡で出土した土器群は殷系土器を中心に構成されている一方で、その一部に周系土器が存在していたことが指摘できよう。

青銅礼器・武器の諸問題 次に青銅礼器・武器について検討する。

図四の一の銅角は一九三一年九月に出土した青銅器群の一部であり、その側視形



1. 1931年9月一括出土品



2. 1931年9月一括出土品



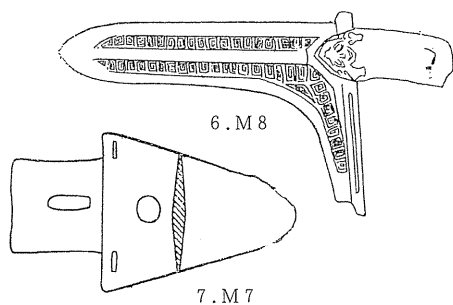
3. M 8



4. M 8



5. M 8



6. M 8

7. M 7

図四 蘇埠屯遺跡出土の青銅器（縮尺不同）



1. 岐山賀家村西塚周墓



2. 北京琉璃河M251



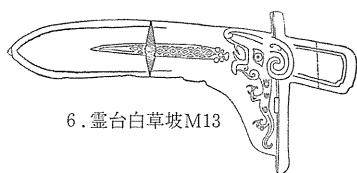
3. 伝. 宝鷄出土「鼎卣」



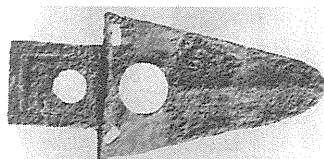
4. 長安濫毛M1



5. 宝鷄竹園溝M13



6. 靈台白草坡M13



7. 長安56-57張家坡

図五 殷末一西周中期の華北各地の青銅器 (縮尺不同)

は林巳奈夫氏の青銅器編年（以下「林編年」と呼ぶ⁽³⁵⁾）の西周Ⅰに相当する。既発表資料による限り銅角は殷墟ではほとんど見られない⁽³⁶⁾。その一方、岐山賀家村出土品（図五の一、林編年・西周ⅠB）など、「克殷」前後から西周時代中期にかけての例が渭河流域で多数発見されており、したがって銅角は殷末から西周前期にかけての周系遺物である可能性が高い器種と言えるのではなからうか。

図四の二の三足盃も一九三一年九月出土の青銅器群の一部であり、その側視形は林編年の殷後期Ⅲ―西周Ⅰに相当する。近似した資料としては、西周時代の燕国の遺跡とされる北京琉璃河遺跡の二五一号墓出土資料（図五の二、林編年・西周Ⅰ）、泉屋博古館収蔵の「戈盃」⁽³⁷⁾（林編年・西周ⅠA）が挙げられる。

図四の三の銅罈は八号墓の出土品であり、その側視形は林編年の西周ⅠAに相当する。当該器は圈足が高く、扉稜の突起部の先端が太く、割り箸の先端のように角張った形状であるのが特徴的である。このような特徴は、伝・宝鶏出土の「鼎卣」⁽³⁸⁾（図五の三、林編年・西周ⅠA）、陝西省涇陽高家堡二号墓出土銅卣⁽³⁸⁾（林編年・西周ⅠA）など、西周前期の青銅器に多く認められる⁽³⁹⁾。

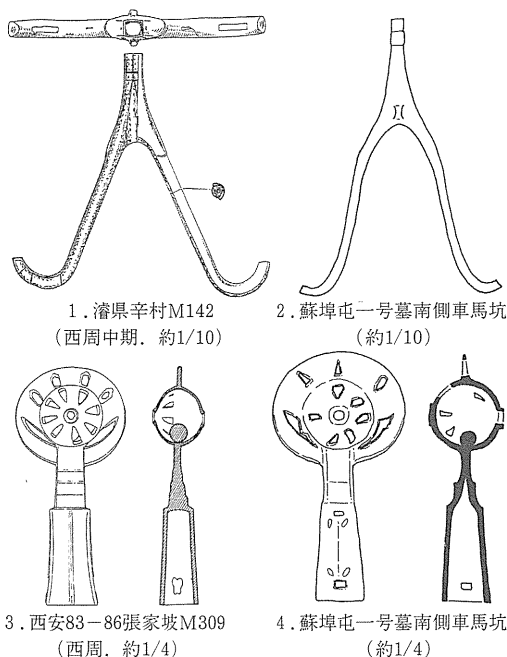
図四の四の銅簋も八号墓の出土品である。その側視形は林編年の西周ⅠAに相当し、腹部には方格乳丁紋を施している。武者章氏が既に指摘したように⁽⁴⁰⁾、殷末から「克殷」直後にかけての渭河流域周辺の在地系統の青銅器群の中には、胴部に方格乳丁紋を施し、図四の四のような側視形を有する銅簋が多数見られる（図五の四）⁽⁴¹⁾。また、胴部に方格乳丁紋を施した銅簋は、殷墟では殷墟Ⅱ期ころまで見られる⁽⁴²⁾が、殷墟Ⅲ期以降は見られなくなる。したがって図五の三は、本来は殷代中期の殷王都に存在した型式が渭河流域で在地化し、その結果として殷末から西周前期

にかけて同地で成立した周系青銅器と思われる。そして蘇埠屯八号墓出土の銅簋(図六の四)は、その側視形と胸部紋様が上述の周系銅簋に近似していることから、周系に属する可能性が高いのではなからうか。

図四の五の銅簋も八号墓の出土品である。円筒形の器体に高めの圈足を持ち、腹部はゆるやかに膨らみ、縄状の提梁が附されている。当該器とほぼ同じ特徴を持つ事例はこれまで未発見である。しかし、筒状の器体を持つ提梁卣は、発掘調査による出土品を概観する限り、宝鶏竹園溝一三号墓出土品(図五の五、林編年・西周Ⅰ)や滕州前掌大一一九号墓出土品⁽⁴³⁾(林編年・西周Ⅰ)等、その全てが「克殷」以後の遺存から出土している。したがって図四の五もまた「克殷」以後に製作された可能性が高いと言えるのではなからうか。

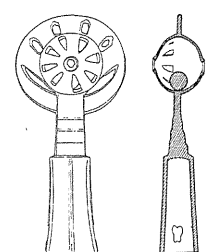
図四の六の銅戈は七号墓の出土品である。本資料は援⁽⁴⁴⁾から胡にかけて雲雷紋が施されている。このように援や胡に紋様を施した銅戈は殷墟では発見されていない。対照的に、殷末―西周時代の渭河流域およびその周辺ではそのような事例が多数見られる(図五の六)。したがって図六の六は殷末から西周時代にかけての周系の資料の可能性が高い、と推定できよう。

図四の七もまた七号墓から出土した銅戈である。本資料は二ヶ所に穿を設け、援の根元附近の中心に大きな孔があり、内にも楕円形の孔が認められる。このような特徴を持つ銅戈は殷墟では発見⁽⁴⁵⁾されていない。現在までのところ図四の七に近似した例は、長安張家坡一六九号墓出土品(図五の七)、扶風北呂Ⅰ区七号墓出土品⁽⁴⁶⁾、宝鶏竹園溝出土品等⁽⁴⁷⁾、殷末―西周時代の渭河流域およびその周辺で多数見られる。したがって図二の七もまた、殷末から西周時代にかけたの周系銅戈と判断できるのではあるまいか。

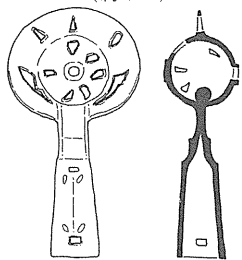


1. 潘縣辛村M142
(西周中期. 約1/10)

2. 蘇埠屯一號墓南側車馬坑
(約1/10)



3. 西安83-86張家坡M309
(西周. 約1/4)



4. 蘇埠屯一號墓南側車馬坑
(約1/4)

図六 華北各地の殷周時代の銅製車馬具

群については、夏名采・劉華国両氏によつて、一号大墓の南約三〇mの位置で一括して出土したことが報告されており、これらは比較的明確な年代判定を行うことが可能な一括出土遺物群であると言えよう。これらを調査・報告した夏・劉両氏はこれらの出土遺構について、一号大墓の附属施設として造られた車馬坑と推定している⁽⁵⁰⁾。以下、筆者は夏・劉両氏の見解に従い、一九六〇年代に車馬具が一括出土した遺構を「一号墓附属南側車馬坑」と呼び、本遺構の一括出土遺物群の一部(図六の二・四)について検討する⁽⁵¹⁾。

上述の諸考察をまとめれば、図四の一―五に示した蘇埠屯出土の青銅礼器・武器は、殷末―西周前期の「周系」遺物、あるいは「克殷」以後に作られた遺物である可能性が大きいと言えよう⁽⁴⁸⁾。

青銅車馬具の諸問題 次に青銅車馬具について検討する。蘇埠屯遺跡では既に一九五〇年代および一九六〇年代の調査で、それぞれ多数の車馬具が出土していることが報告されているが、残念なことに両者の詳細な情報は不明である⁽⁴⁹⁾。その一方、一九七〇年代に出土した車馬具の一

図六の一の軛は全体が青銅で作られている。股の部分の表面の一部が橋状に盛り上がり、その中を孔が横方向に貫通しているように見える。

殷墟で軛は幾つか発見されているが、そのほとんどが木製の部品と青銅の部品を組み合わせて作られている。殷墟で出土した、全体が青銅で作られた銅軛はこれまで二点公表されているが、⁽⁵²⁾両者の形状は図六の二と大きく異なる。加えて、図六の二の股の部分に見られる橋状の盛り上がりは殷墟出土品には見られない。

既発表の資料に依拠する限り、図六の二に近似する資料としては濬県辛村一四二号墓出土品（図六の一）が挙げられる。蘇埠屯採集品と同じく全体が青銅で作られ、股の部分に橋状の盛り上がり認められる。周知のように濬県辛村遺跡は西周前期—中期の衛国の墓地とされている。⁽⁵³⁾また洛陽北窯四五三号墓（西周前期）からもほぼ同様の特徴を持つ軛が出土している。⁽⁵⁴⁾したがって濬県辛村出土品（図六の一）のような銅軛が出現するのは、西周時代の可能性が大きい。同時に蘇埠屯採集品（図八の一）の年代もまた西周時代に下る可能性が大きいのではなからうか。

図八の四の鑿は下部がソケット状となっており、上部は中空の容器の中に銅製の球が入っている。このような鑿は殷墟では出土していない。対照的に、既に呉曉筠氏が指摘したように、⁽⁵⁵⁾華北各地の西周期遺存で図六の四のような鑿は多数出土している。例を挙げれば、長安張家坡三〇九号墓出土品（西周、図六の三）、洛陽北窯一七四号墓出土品（西周前期）、⁽⁵⁶⁾宝鶏竹園溝・茹家莊出土品（西周前・中期）、⁽⁵⁷⁾などである。そしてこのような鑿は安陽殷墟では一点も出土していない。したがって図六の四のような形状の鑿が出現したのは、「克殷」以後であり、図六の四の年代もまた「克殷」以後である可能性が大きい。

上述の諸考察をまとめれば、蘇埠屯一号墓附属南側車馬坑から出土した青銅車馬具である図六の二・四は「克殷」以後に作られた製品である可能性が大きく、またその下限年代は西周中期であり、同後期に下る可能性は小さいと言えるのではあるまいか。

蘇埠屯遺跡の各遺構の年代 本節のまとめとして蘇埠屯遺跡で発見された遺構の年代を考えてみたい。

先ず下限年代について述べる。本遺跡からは多くの西周時代の遺物が出土している。それらのうち、青銅礼器の年代は林編年の西周Ⅰ（西周前期）に相当し、西周Ⅱ（西周中期）に相当する資料は報告されていない。また、西周中期を下限とする濬県辛村から出土した銅軛は、上述したように蘇埠屯出土の銅軛に近似しており（図六の一・二）、後者の銅軛の年代が西周中期に下る可能性を示している。その一方、しかし管見では西周後期に相当する遺物は蘇埠屯近辺では未だに出土していない。したがって現時点では蘇埠屯遺跡の下限年代が西周後期に下るとは考えられず、西周前期末、あるいは西周中期が本遺跡の下限年代であろう。

次に上限年代について述べる。本節で述べてきたように、蘇埠屯遺跡からは

① 上限年代が殷末である殷系遺物（図二の一・三・五等）。

② 殷末から西周時代にかけての「周系」遺物（図二の二・六、図四の一・四・六・七等）。

③ 「克殷」以後に下る遺物（図四の二・三・五、図六の二・四等）。

以上、三系統の遺物が存在する。

これらのうち①に注目すれば、本遺跡の上限年代が殷末であることが推測できるだろう。

ただし、上述②が出土した遺構について、②が「克殷」以前に作られた可能性があることに依拠し、これらの遺構の上限年代を「克殷」以前に設定することは困難である、と筆者は考える。その理由は以下の通りである。

古文献や金文・甲骨文の記述に依拠する限り、「克殷」以前の周が黄河下流域まで進出した形跡は無い。現在のところ、「克殷」以前に上述の周系の遺物そのもの、あるいはそれらの製作技法等が、周の本拠地である渭河流域から山東の蘇埠屯まで、殷王朝の本拠地である河南省北部を飛び越えて招来されたとは考えにくい。したがって、周が殷を滅ぼして王朝を立てたのち、周王朝の政治的・文化的影響力が淄河以東に波及するのと同時に周系の遺物、あるいはそれらの製作技法等が蘇埠屯附近にもたらされた、と想定するのが妥当な解釈ではなからうか。したがって、上述②の出土遺構は、「克殷」以後に造られた可能性が高いと考えられよう。

以上に述べた考察に依拠しながら、各遺構の上限年代について考えてみたい。上述②③は、七号墓・八号墓・一号大墓附属南側車馬坑・一九三一年九月発見器物坑から出土している。これらの遺構は「克殷」以後に造られた蓋然性が高いと解釈できよう。また上述の車馬坑が一号大墓に附随する施設として造られていることを考えると、一号大墓の年代もまた車馬坑とほぼ同時期、つまり「克殷」以後に位置付けられるのではなからうか。その他の遺構については、出土遺物の特徴から殷末―西周時代の範囲の年代に位置付けられると考えられる(表一参照)。

第五節 蘇埠屯遺跡の被葬者について

蘇埠屯遺跡の被葬者の属した社会階層 前節で述べたように、蘇埠屯遺跡で発見された土壙墓の多くから多数の

表一 蘇埠屯遺跡の各遺構の年代

遺構名	筆者の推定年代	推定年代の根拠	備考
1号墓	西周前期頃	土器(図二の1)が殷墟の殷末頃の資料に近似。また、本遺構の南側で発見された車馬坑の年代が「克殷」以後(本表参照)。	調査時、既に盗掘を受けていた。
7号墓	西周前期	周系の土器(図二の2.6)および周系の青銅武器(図四の6.7)が出土。	未盗掘状態で発見。
8号墓	西周前期	銅簋(図四の4)の型式・紋様が、殷末周初の渭河流域周辺の銅簋(図5の4)に近似。銅罈(図四の4)の型式が林福年の西周Iに相当。	未盗掘状態で発見。
11号墓	殷末-西周前期	陶盃(「青州」図14の3)の型式が、滕州前掌大1998M4出土品(『磁器』図版30.31)に近似。	前掌大1998M4の年代については、黄川田2001を参照。
1931年4月発見器物坑	殷末-西周前期	銅製の鼎・罈・爵(「山東」図版1.2.5)の型式が、それぞれ林福年の殷後期III-西周I、殷後期III、殷後期III-西周Iに相当。	土墳墓の可能性が大きい。
1931年9月発見器物坑	西周前期	銅角(図四の1)と銅盃(図五の2)の型式が、それぞれ林福年の西周I、殷後期III-西周Iに相当。	土墳墓の可能性が大きい。
1号墓附属南側車馬坑	西周前-中期	車馬具(図六の2.4)が、華北各地の西周前-中期の土墳墓の出土品(図六の1.3)に近似。	夏氏らは、1号墓の南墓道の附近に存在したと推定(夏・劉1996)。

「山東」＝「山東益都蘇埠屯出土銅器調査記」(祁1947)

『磁器』＝『磁器の誕生——原始瓷器——』(山口県立萩美術館・浦上記念館2000)

「青州」＝「青州市蘇埠屯商代墓地発掘」(山東省文物考古研究所等1989)

青銅礼器が発見されている。周知のように、先秦時代の中国世界において青銅礼器は支配階層の権力の象徴であった。⁽⁵⁸⁾したがってこれら蘇埠屯遺跡の土壙墓群が、本遺跡の附近に存在し、これらの墓地を形成した邑の支配階層の墓地であったことについてはほぼ異論の余地は無いと考えられる。

被葬者と殷王都との関連 それではこれらの土壙墓の被葬者は、どのような文化伝統を持つ集団に属していたのだろうか。この問題を考える時に特に注目される遺構は、蘇埠屯遺跡の中心に位置する一号大墓である。既に第二節で述べたように、この一号大墓は「亜字形墓」と呼ばれる構造を持つ。⁽⁵⁹⁾周知のように亜字形墓はこれまで安陽の侯家荘で多数発見されているが、安陽以外ではほとんど発見されていない。一般に侯家荘の大墓群は歴代の殷王の墓と言われており、したがって亜字形墓という概念そのものが殷の王室と強い関係を持っていると考えられる。既に張長寿氏が指摘しているように、⁽⁶⁰⁾これまで安陽以外で発見された亜字形墓は蘇埠屯の一号大墓だけである。したがって、一号大墓の墓室構造は殷王室の文化伝統と強い関連を持っている可能性が高いと言えるのではあるまいか。

また、殷系文化の強い影響は墓室の構造だけではなく、副葬品にも認められることを指摘しておきたい。既に前節で触れたように、蘇埠屯遺跡では多数の殷系土器が出土している(図二の一・三・五)。これら蘇埠屯出土の殷系土器群の中で特に注目される器種は、爵(図二の四)と觚(図二の三)である。西江清高氏が述べているように、⁽⁶¹⁾両器種は安陽以外ではほとんど発見されない資料であり、殷系土器の中でも特に殷王都の文化伝統と強い関連を持つ器種と考えられる。したがって殷系の陶爵と陶觚の存在は、蘇埠屯遺跡の被葬者が殷王都の文化伝統と強い関連を持っていたことを示していると言えよう。



2. 伝、宝鷄出土「鼎卣」
〔図5の3参照〕



1. 蘇埠屯M8出土銅卣
〔図4の3参照〕

図七 青銅礼器の腹部に見られる鳥紋（縮尺不同）

被葬者と周王室の関係 蘇埠屯遺跡と西周王朝の関係を考察する上で重要な遺物は、「克殷」以後に蘇埠屯近辺にもたらされた、あるいは「克殷」後に鑄造されたと考えられる青銅器群である（図四の一・七、図六の二・四）。これらの青銅器群の中には成形が粗雑なものが見られる一方で、質の高い青銅器も多数含まれている。後者の例の一つが八号墓出土の銅觶（図四の三）で、側視形は同時代の周王朝中心地の銅卣（図五の三）と同様に設計されており、紋様（図七の二）もまた周王朝中心地の製品のそれ（図七の二）とほぼ同一に仕上げられている。既発表の諸資料に依拠する限り、西周前期に蘇埠屯近辺の鑄造工房で図四の三のような青銅器を製造し得たとは考えにくい。したがって図四の三は周王朝の工房で鑄造され、蘇埠屯遺跡を形成した邑の首長へ周王室より下賜された製品である、と考えるのが妥当な解釈であるように思われる。⁽⁶⁴⁾つまり、この首長は周王朝と密接な関係を結んだ当地の諸侯であった蓋然性が高いのではな

かろうか。

第六節 まとめ——蘇埠屯遺跡成立の背景——

本稿での諸考察の結果、蘇埠屯遺跡について以下のような結論が得られた。

① 七号墓・八号墓・一号墓附属南側車馬坑・一九三一年九月発見器物坑、これらの遺構は「克殷」以後に造られた可能性が高い。上記車馬坑が附属する一号大墓もまた、「克殷」以後の造営と想定できる。その他の遺構は、殷末―西周前期頃の範囲の年代に位置附けられる。また本遺跡の下限年代は西周前期末―同中期である。

② 土壙墓の被葬者たちは、殷王都の文化伝統と密接な関係を持つ集団の出自だと考えられる。

③ 「克殷」以後、本遺跡の土壙墓群を造営した邑の首長は、周王朝と密接な関係を結んだ当地の諸侯であった蓋然性が高い。

筆者は上述の結論に依拠し、本遺跡の背景について以下の考察を述べたい。本遺跡の遺存の大半は、「克殷」以後、周王朝と君臣関係を結んだ諸侯が統治する邑によって造営された。この諸侯は、一般に歴史学で「封建諸侯」と呼ばれる人物に相当し、彼の統治していた邑は「封建諸侯国」と呼ばれる共同体に相当すると考えられる。したがって蘇埠屯遺跡の遺存の大半は、封建諸侯国の国都に附属する墓地として造られたと見なすが、現時点ではもつとも妥当な判断ではなからうか。

同時に、上述①について以下の点を強調しておきたい。本遺跡では今日に至るまで、上限年代が「克殷」以前に溯り得る未盗掘遺構は発見されていない。したがって、本遺跡の上限年代が「克殷」以前に溯り得る可能性を積極的に裏付ける証拠はほとんど存在しないと考える。その一方で「克殷」以後に造られた可能性が高いと判断できる遺構は既に五基発見されている。したがって蘇埠屯遺跡の形成年代の上限は「克殷」以後である可能性が高いように思われる。

以上の諸考察を踏まえ、蘇埠屯遺跡形成の背景について筆者は以下のような解釈を提示したい。本稿冒頭に述べたように、古文獻が伝える「營丘」の所在地は淄河・瀾河の両流域の一带に存在している。また拙稿で述べたように⁽⁶⁵⁾、臨淄周辺が齊の拠点の一つとして機能し始める年代は、臨淄周辺の出土資料から判断する限り、その上限は西周前期後半―西周中期であり、前期初頭まで遡るとは考えにくい。もしも『史記』太公望世家の《武王……封師尚父於齊營丘》という記述が史実を反映しているならば、西周前期から中期にかけての齊の国都は山東東部の臨淄以外のどこかに置かれたと考えざるを得ない。あくまで一つの「仮説」ではあるが、現在まで淄河・瀾河の両流域一帯で、大量の青銅礼器が発見された西周前期の遺跡が蘇埠屯遺跡以外に存在しないことを考慮すれば、蘇埠屯遺跡は西周前期頃の齊国の支配階層の墓地であり、營丘は蘇埠屯近辺に存在した可能性が高いのではあるまいか⁽⁶⁶⁾。

なお、『史記』齊太公世家の《姓姜氏》という記述を重視し、一号大墓のような、殷王室と密接な関係を持つ形式である「亜字形墓」を、「姜氏」つまり一般に西方に起源を持つと見られる集団の出自である呂尚（太公望）の一族が用いることを疑問視する研究者も、あるいは少なくないかもしれない⁽⁶⁷⁾。しかし姜姓の起源地についてはさまざま見解があり、呂尚の所属集団の「克殷」以前の居住地については、今後もおお検討が必要であろう⁽⁶⁸⁾。また齊太公世家は呂尚の出自について、《或曰、太公博聞、嘗事紂。紂無道、去之。》という伝承を記している。もしも「克殷」以前の呂尚が殷王朝の政権中枢に位置した有力諸侯であったのなら、⁽⁶⁹⁾「克殷」後の東方世界の支配権を殷王朝から引き継いだことを山東半島の諸集団に誇示するため、⁽⁷⁰⁾呂尚あるいは彼の後裔が亜字形墓を自らの墓として造営した蓋然性は決して小さくないのではなからうか。

ここで営丘所在地に対する筆者の考えを述べておきたい。本稿冒頭で触れたように、近年張学海氏は寿光市高宋台遺跡こそ営丘だと主張している。高宋台遺跡は蘇埠屯遺跡と同じく共に瀾河流域に位置し、両者の距離は1.1kmと比較的近い(図一参照)。右に述べたように、仮に蘇埠屯遺跡が「斉侯墓地」であるのなら、張氏の主張するように高宋台遺跡が西周前期頃の斉の国都であった⁽⁷¹⁾、あるいは国都に準ずる拠点的な邑の所在地であったのかもされない。しかし残念ながら、これまで公表された高宋台出土の土器群は⁽⁷²⁾、陝西省長安県豊鎬遺跡群の土器編年と比較検討する限り、その上限年代はほぼ西周前期後半であり、前期初頭まで遡るとは考えにくい⁽⁷³⁾。古文献が伝える営丘造営の年代は周の武王期から成王期⁽⁷⁴⁾、つまり西周前期初頭であり、これは高宋台遺跡の土器群の年代と一致しない。加えて同遺跡の既発表遺物のほとんどが土器であって、当時の重要な祭器であった青銅礼器は極めて少なく⁽⁷⁵⁾、このため現時点では高宋台が営丘であったことを確定することは難しい。したがって本稿では、営丘と高宋台遺跡の関係について以下のA・B両案を提示するに止め、更なる考察は将来の調査の進展を待つて行うこととしたい⁽⁷⁶⁾。

〔仮説A〕 営丘の所在地は現在の高宋台遺跡であり、同遺跡には未発見の西周初期の遺存が存在する。

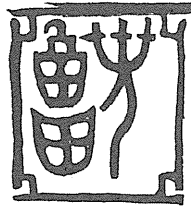
〔仮説B〕 高宋台遺跡は営丘の所在地ではなく、西周前期後半から同中期にかけての斉国内で、国都に準ずる地位の邑が存在した場所である。営丘は、瀾河流域の高宋台以外の何処かに存在した⁽⁷⁷⁾。

最後に、右に述べた「蘇埠屯遺跡Ⅱ斉侯墓地」という仮設に関わる材料として、蘇埠屯出土青銅器の銘文について簡単に触れておきたい。

一号大墓出土の銅鉞、および七号墓出土の多数の青銅礼器には図八の三に示したような図象銘が見られる。殷之



1. 《農亩》銘文中の「妻」字



2. 蘇埠屯M1出土銅鉞「妻」銘



3. 《鬼壺》銘文中の「鬼」字

図八 「妻」字および関連する古文字（縮尺不同）

彝氏が詳述しているように⁽⁷⁸⁾、同様の特徴の図象銘を持つ青銅礼器は、既に民国時代の時点で中国内外の青銅器コレクション中に多数認められ⁽⁷⁹⁾、学界の関心を集めていた。一九三一年に郭沫若氏はこの図象銘を「亜醜」と釈読し⁽⁸⁰⁾、上述の殷氏および蘇埠屯遺跡発掘担当者等もまた同様の釈読を行っている⁽⁸¹⁾。

しかし按ずるに、殷代および西周期の金文で用いられる「鬼」の字形（図八の三）と、蘇埠屯出土銅器の「妻」の右偏の字形は大きく異なる。したがって、「妻」を「醜」と釈することについては、疑問の余地があるように筆者には思える。ここで注目したいのは、近年これらの図象銘について李零氏が提示した解釈である。李氏は「妻」が西周金文の「妻」字（図八の一）に類似することから⁽⁸²⁾、「妻」を「齊」と釈し、さらに「妻」「齊」両字の音が通じることから⁽⁸³⁾、「妻」を「齊」と読むべきだと主張している。李氏が主張するように、「妻」の形状は「鬼」字よりも「妻」字に近い、と見るべきであろう。本稿では「妻」を「醜」と解し、これを「妻（齊）」と読むこととする。

このように、蘇埠屯出土青銅器の銘文に依拠するならば、本遺跡の被葬者の属した集団が「妻（齊）」である蓋然性は決して小さくないように思われる。この解釈は、本稿で提示したモノと遺構に依拠して導き出した仮説に対する傍

証となり得るのではなからうか。蘇埠屯遺跡が齊侯墓地である可能性が、モノ・遺構と文字の両面から提示できることを指摘し、本稿の結びとしたい。

註

- (1) 平勢一九九六に依拠。以下、本稿で記す西暦は全て平勢一九九六に依拠する。
- (2) 『古本竹書紀年』は『康王六年齊太公望卒』と記す。
- (3) 『古本竹書紀年』は『夷王三年王致諸侯烹齊哀公』と記す。
- (4) 関野一九四二。
- (5) 黄川田二〇〇三、表二。
- (6) 上述したように、齊太公望世家によれば太公望が營丘に封じられたのは「克殷」(前一〇二三年頃)の直後、また、胡公が国都を營丘より薄姑に遷したのは周の夷王の治世(前八六三―八五四年頃)である。従って營丘に国都が置かれた期間は約一六〇年前後となる。
- (7) 張一九九九、三三四―三三五頁。なお、尚宋台出土の土器・青銅器は寿光県博物館一九八九、図一六に掲載されている。
- (8) 張一九九九、三三四―三三五頁。

(9) 黄川田二〇〇三、表二。

(10) 營丘を現在の昌樂の附近とする説は、左掲の記述に依拠している。

『漢書』地理志、北海群、營陵、本注『或曰營丘』同、應劭注『師尚父封於營丘、陵亦丘也』。

また、營丘を現在の臨淄の附近とする説は、左掲の記述に依拠している。

『漢書』地理志、北海群、營陵、臣讀注『營丘即臨淄也』。

『史記』齊太公世家、營丘、正義注『《括地誌》云營丘在青州臨淄北百步外城中』。

『水經注』淄水、《爾雅》云、水出其前、左爲營丘、武王以其地太公望、賜是以四履、都營丘爲齊、或以爲都營陵。(中略)今臨淄城中有丘、在小城內、周廻三百步、高九丈、北降丈五、淄水出其前、故有營丘之名、與『爾雅』相符。

(11) 祁一九四七。

(12) 衛聚賢氏によれば、蘇埠屯遺跡での銅器群の出土直後、

当時の北平の新聞、『晨报』上で出土状況等について詳しい報道がなされたようである(衛一九三七、一四四頁)。

(13) *DRAKE* 一九三九/四〇。祁一九四七。なお民国時代の山東半島の考古学研究に対するメンジース氏、ドレイク氏の貢献については左掲文献を参照されたい。方二〇〇〇。黄川田二〇〇二。

(14) 山東省博物館一九七二。山東省文物考古研究所等一九八九。夏・劉一九九六。

(15) 山東省文物考古研究所等一九八九、図一に依拠。

(16) 山東省博物館一九七二。

(17) 本稿表一参照。

(18) 本稿表一参照。

(19) 山東省博物館一九七二。

(20) ここで述べた蘇埠屯遺跡の土壙墓の分布状況については、すでに左掲文献で鈴木敦氏が詳細に分析を行っている。鈴木一九九一。

(21) *DRAKE* 一九三九/四〇、Fig.31 a-c。 *DRAKE* 氏はこれらの土器の出土状況について以下のように記している。

“These three vessels together with others of similar type came from the same pit in Region Five, Site 1,

a pit in which inscribed bronze vessels of Shang date were also found.” (*DRAKE* 一九三九/四〇、三九五頁)

一九三一年の青銅器群の出土は四月と九月の二次にわたっており、祁延霈氏は第一次出土の時は青銅器のみが出土し、第二次の際には青銅器群と共に複数の土器が出土したと記している(祁一九四七、一六八頁)。祁氏とドレイク氏両者の報告を総合すると、上述したドレイク氏収集の土器群は一九三一年九月に、図六の一・二等の青銅器群と共に出土した可能性が高い。

(22) *DRAKE* 一九三九/四〇、三九五頁。なおこの分析でドレイク氏は、メンジース氏が安陽殷墟で収集した土器を比較材料として用いている。研究史上のドレイク氏とメンジース氏の関連については、黄川田二〇〇二、四二・四三頁参照。

(23) 北京大学歴史系考古教研室商周組一九七九、一〇九頁。*CHANG* 一九八〇、三一一頁。*CHANG* 一九八〇、三一一頁。中国社会科学院考古研究所一九八四、二四〇頁。張学海一九八九、三三四頁。王一九九四、図四。鈴木一九九四、四六頁。*BAGLEY* 一九九九、二一九―二二二頁。等。

(24) 山東省文物考古研究所等一九八九、二七二―二七三頁。
(25) 中国社会科学院考古研究所一九八四、二四〇頁。朱一

九九五、六四九一六五一頁。BAGLEY 一九九八、一一一
九一二二頁。等。

(26) 衛一九三七、一四四頁。

(27) 郭一九八一、三一・一七六頁。

(28) RAWSON 一九九九、三八二頁。

- (29) 本稿で使用する「殷系」「周系」の定義については、下
掲論考二・一二二頁を参照いただきたい。黄川田二〇〇一。
ただし、既に松丸道雄氏が述べたように(松丸一九八〇、
三一九頁)、西周時代の青銅器の多くは「克殷」後に殷王
都から周王都に遷された鑄造工房によって造られたと考え
られ、殷代当時の技術をほぼそのまま用いて周王朝の青銅
器を鑄造していた可能性が高い。このため殷末―西周前期
の青銅器の多くは殷・周両系統に分類することが困難であ
る。このため本稿では、「克殷」以前から周本拠地で使用
されていたと考えられる幾つかの器種を除き、青銅器の多
くの器種に対しては殷・周両系統への分類を行っていない。
- (30) 中国社会科学院考古研究所一九八七、図一七三。
(31) 中国社会科学院考古研究所一九八七、図一七八。
(32) 中国社会科学院考古研究所一九八七、図一七九。
(33) 中国社会科学院考古研究所一九八七、図一七〇。
(34) 西江一九九三・一九九四。

(35) 林一九八四。

(36) 例外的に郭家莊一六〇号墓から銅角が多数出土してい
る(中国社会科学院考古研究所一九九八、図七八の一五)。
しかし郭家莊一六〇号墓からは、林福年の西周ⅠAに相当
する青銅器が大量に出土しており(同前、図六四・六五・
六九等)、当該墓の年代が「克殷」以後に下る可能性が少
なくない。しだつて本稿では殷王都の「殷系」文化を考え
る時には、郭家莊一六〇号墓を除外して考えることとする。

(37) 浜田一九一八、第二冊、第九八図。

(38) 陝西省考古研究所一九九五、単色図版九。

(39) 林巴奈夫氏の教示による。

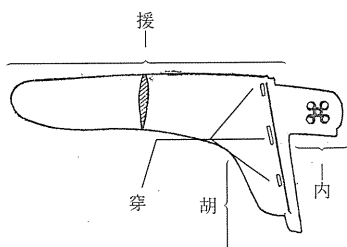
(40) 武者一九八九。

(41) 武者氏はこれらの銅簋を他の同器種資料と区別し、
「斜方格乳釘紋夔竜文殷」と呼称している(武者一九八九)。

(42) 中国社会科学院考古研究所一九八〇、図版十六。同
一九八五、図五二。等。

(43) 中国社会科学院考古研究所山東工作隊二〇〇〇、図五
の二。

(44) 銅戈の各部位の名称については、林一九七二、図五に
依拠し、次頁掲図のように定めた。



(45) 殷墟西区三四七号墓および三五五号墓では、蘇埠屯七号墓出土銅戈(図六の七)に比較的近似した銅戈が各一点出土している(中国社会科学院考古研究所安阳工作队一九七九、図六四の三・四)。しかし、これら出土品は内に孔が見られず、渭河流域周辺や蘇埠屯七号墓の出土品と異なる。

(46) 羅一九九五、図九三の七。

(47) 盧・胡一九八八、図九二の八、図一〇五の一。

(48) 蘇埠屯遺跡では铸造年代が殷末に溯り得る青銅器も幾つか出土している(山東省文物考古研究所等一九八九、図

版一〇の一等)。ただしこれらの青銅器については多くの論者が考察しているため、本稿では言及しない。

(49) 山東文物管理处等一九五九、図七九一八四。齊一九七二、四・五頁。

(50) 夏等一九九六。

(51) 殷周時代の車馬具の名称については、主に林一九七六および郭一九九八に依拠した。

(52) 馬等一九五五、図版二八。中国社会科学院考古研究所一九九八、図一〇二の四。

(53) 郭一九六四、七二一七四頁。また林巴奈夫氏は林一九八四の中で、濬県辛村出土の青銅器を西周I-IIに位置付けている。

(54) 洛陽市文物工作队一九九九、図七八の一。

(55) 吳二〇〇二、図四二(五)。

(56) 洛陽市文物工作队一九九九、図七七の一・六。

(57) 盧・胡一九八八、図版五六の二、図版六七の二。等。

(58) 容一九四一、上、第一頁。

(59) 山東省博物館一九七二、図二。

(60) 中国社会科学院考古研究所一九八四、二四〇頁。

(61) 小沢等一九九九、一五五頁。

(62) 一九三二年九月出土青銅器群に含まれる銅觚は、紋様

構成が粗雑な上、彫りが浅いために紋様自体が不鮮明であり、殷王都および周王都の青銅器とは大きく異なる。この銅觚は黄河中流域から蘇埠屯近辺へと将来された製品を模し、現地工房で鑄造されたものであるかもしれない。以上の所見は、二〇〇二年十二月一日に筆者が山東省博物館陳列室で実見した際の観察に依拠する。

(63) 図四の三と同様の側視形の銅卣は、陝西省涇陽高家堡(陝西省考古研究所一九九四、単色版一九)等で出土している。

(64) 西周時代の諸侯と王との間の君臣關係を維持する上で、青銅礼器が担っていた機能については「西周青銅器製作の背景」(松丸一九八〇、一一—一三六頁)を参照。なお本稿では紙数の制限のため詳細には述べられないが、図四の四の紋様の仕上がりレベルは高く、器形も整っており、同器もまた周王朝からの下賜品と考えられる。

(65) 黄川田二〇〇三。

(66) 筆者は二〇〇三年一〇月に山東省寿光市で遺跡踏査を実施した際、同市博物館で地元の考古学者たちと意見交換を行った。この時筆者が斉国始封地に対する彼らの見解を訊ねたところ、濰河流域の考古学調査に三〇年以上従事してきた賈效孔氏(寿光市博物館前館長)は、「私は、蘇埠

屯遺跡こそ斉侯墓地である、と考えている。」と述べたため、筆者は賈氏に「現在私が想定している仮説と全く同じである。」と伝えた。本稿で提示した仮説は、紙面の上では筆者が今回初めて提示するものであるが、現地の考古学者の一部が既に想定していた見解でもあることをここに明記しておく。

(67) 本文で述べたように、学界では『説文解字』等の記述に依拠して姜氏の起源地を陝西省関中盆地と想定するのが定説となっており、『中国歴史地図集』第一冊(譚一九八二)、一七頁が、西周時代の姜の居住地を渭河上流に存在したものと表示しているのはその典型例である。姜氏の起源地に関する古文獻の記述については、楊一九四一を参照されたい。

(68) 白川静氏は前注の「関中説」に異を唱え、古文獻中の伝承および関連する甲骨卜辞の検討を経て、姜姓の起源地が関中盆地ではなく、嵩山を中心とする河南省西部一帯であると結論附けた(白川一九七四)。仮に白川氏の主張が史実に近いのならば、「克殷」以前の呂尚が所属した集団は、歴史的に殷王朝の政治的基盤であった鄭州—洛陽近辺一帯に居住していた可能性もあるだろう。

(69) もしも白川氏が主張するように(前注参照)、姜姓の

集団の起源地が嵩山周辺一带にあったとすれば、「克殷」以前の呂尚が殷王朝の有力諸侯であり、且つ姜姓の出自であったとしても、これらの記述は矛盾しないであろう。

(70) 『史記』齊太公世家には以下の記述が見え、東方世界の統治に関して呂尚が周王朝から大きな権限を委譲されていた可能性を想定できる。

乃周成王少時、管蔡作乱、淮夷畔周、乃使召康公命太公曰：「東至海、西至河、南至穆稜、北至無隸、五侯九伯、實得征之。」齊由此得征伐、爲大實。

(71) 張一九九九。

(72) 寿光県博物館一九八九、図一六。

(73) 本来は高宋台の土器群の年代について詳細な考察を行うべきではあるが、紙数の都合上今回は割愛し、将来稿を改めて述べることにしたい。なお、本稿で述べた高宋台出土土器群についての筆者の見解は、二〇〇二年一月および二〇〇三年一月に寿光市博物館で筆者が行った資料調査に依拠している。

(74) 黄川田二〇〇三、第二節を参照。

(75) 寿光県博物館一九八九によれば、高宋台から出土した青銅礼器は僅か二点である。

(76) 二〇〇三年一月に筆者が高宋台遺跡を踏査した際、

上述の賈效孔氏が語った話によれば、一九八〇年代半ばに山東省考古研究所が高宋台遺跡で発掘調査を実施し、土壙墓二基を発掘したという。残念ながらこの時の調査成果は現在まで未発表であり、これらの情報が将来公開されれば、高宋台遺跡について詳細な議論を行うことが可能となるであろう。

(77) 本稿で述べたように、蘇埠屯遺跡の年代はほぼ西周前期であり、同中期頃を境に墓地造営は停止したと考えられる。その一方で、既に拙稿で述べたように(黄川田二〇〇三、表一)、古文獻に記された營丘存続の年代は武王・成王期から厲王期、つまり西周前期初頭から西周後期にかけてであり、上述した蘇埠屯遺跡の年代と完全には一致しない。このズレについて現時点で筆者は、①蘇埠屯遺跡に本来存在した西周中期の遺構が二十世紀初頭の遺跡発見の時点で既に破壊されていた、②蘇埠屯遺跡近辺に未発見の西周中期の斉侯墓地が存在する、以上二種の可能性を想定している。瀋河流域の考古学調査は現在も不十分なままであり、したがって更に詳細な考察は将来の調査進展の後に行うことにしたい。

(78) 殷一九七七。

(79) 殷之彝氏が述べたように(殷一九七七)、「亜」銘を

持つこれらの銅器群は、蘇埠屯から出土した可能性が高い
と言えよう。

(80) 郭一九三一。

(81) 殷一九七七。山東省博物館一九七二。山東省文物考古
研究所等一九八九。その一方容庚氏は下掲文献中で、この
図象銘に対して隸定を行わずに「覲」と表記しており、郭
氏よりも慎重な姿勢を採っている。容一九四一、上冊六七—
七一頁。

(82) 李氏は李一九九二で「妻」「齊」両字が普通であるこ
との論拠として、『説文解字』『白虎通義』などを引用して
いる(上掲書四四頁)。なお上述文献では李氏は言及してい
ないが、董同龢氏の『上古音韻表稿』に拠れば、「妻」の
上古音は〈*ts'ied*〉、「齊」は〈*ts'ied*〉である(董一九
四四、二二四頁)。董氏に解釈による限り、両者が普通で
ある可能性は高い、言えるのではなからうか。

(83) 李一九九二。ただし、李氏は蘇埠屯出土銅器を殷代と
する前提に立ちつつ検討を行っており、その結論部では、
殷代の蘇埠屯周辺に居住した部族集団の名前として「齊」
を解釈している。

【挿図出所】

図一 “TACTICAL PILOTAGE” TPC G-10D およ
び諸報告に依拠して筆者作成。

図二 一・一・四・六

『海岱考古』第一輯、二五九頁、図六。

三 『文物』一九七二年第八期、二八頁、図二七。

五 『海岱考古』第一輯、二六九頁、図十四。

図三 一 『考古学報』一九八〇年第四期、四九一頁、図三
九。

二・三 同、四八三頁、図二六。

四 同、四八九頁、図三四。

図四 一 『山東省博物館藏品選』、図版四五。

二 『山東文物精華』、図版一〇六。

三 同、図版一〇二。

四 同、図版一〇一。

五 『黄河の酒神展』、図版四五。

六・七 『海岱考古』第一輯、二五八頁、図五。

図五 一 『陕西出土商周青銅器』(一)、図版二五六。

二 『琉璃河西周燕国墓地』、彩版四四。

三 『商周彝器通考』、下冊、図版六〇七。

四 『考古』一九八四年第九期、図版一。

五 『中国青銅器全集』第六卷、図版一七六。

六 『考古学報』一九七七年第二期、一一三頁、図八一。

七 『澧西発掘報告』、図版六九。

図六 一 『殷周車器研究』、図三八。

二 『考古』一九九六年第五期、二三三頁、図三。

三 『張家坡西周墓地』、図一五八。

四 『考古』一九九六年第五期、二五五頁、図五。

図七 一 『海岱考古』第一輯、二六五頁、図十一。

二 『柘禁の考古学的研究』、図版十三。

図八 一 『三代吉金文存』、卷十二、葉五九をもとに筆者作成。

二 『中国・山東省の秘宝』、図版十一を基に筆者作成。

三 『商周金文録遺』、二二五をもとに筆者作成。

【参考文献】

《華文および和文》

殷之彝 一九七七 『山東蘇埠屯墓地和〈亜醜〉銅器』 『考古学報』一九七七年第二期、二三一—三五頁。

衛聚賢 一九三七 『中国文化叢書第一輯 中国考古学史』

商務印書館、一九三七年二月、上海。

王 迅 一九九四 『東夷文化与淮夷文化研究』 北京大学出版社、一九九四年四月、北京。

小沢正人、谷豊信、西江清高 一九九九 『世界の考古学⑦ 中国の考古学』 同成社、一九九九年十一月、東京。

夏名采、劉華国 一九九六 『山東青州市蘇埠屯墓群出土的青銅器』 『考古』一九九六年第五期、二二—二八頁。

郭宝鈞 一九六四 『濬県辛村』 科学出版社、一九六四年十月、北京。

一九八一 『商周銅器綜合研究』 文物出版社、一九八一年十二月、北京。

一九九八 『殷周車器研究』 文物出版社、一九九八年十二月、北京。

郭沫若 一九三一 『殷彝中図形文字之一解』 『殷周青銅器銘文研究』 郭沫若、一九三二年六月、上海大東書局、上卷、一一—一〇頁。

一九四七 『山東益都蘇埠屯出土銅器調査記』 『中国考古学報』 第二册（一九四七年）、一六七—一七七頁。

祁延霈 二〇〇一 『曲阜以前の魯国の所在に対する一試論—中国山東省前掌大遺跡の諸問題—』 『考古学雑誌』 第八六卷第三号（二〇〇一年）、一一四—八頁。

黄川田修 二〇〇一 『曲阜以前の魯国の所在に対する一試論—中国山東省前掌大遺跡の諸問題—』 『考古学雑誌』 第八六卷第三号（二〇〇一年）、一一四—八頁。

二〇〇一 『曲阜以前の魯国の所在に対する一試論—中国山東省前掌大遺跡の諸問題—』 『考古学雑誌』 第八六卷第三号（二〇〇一年）、一一四—八頁。

二〇〇二「済南遺跡群の諸問題—殷周時代の土器群の分析を中心に—」『亞洲学誌』創刊号「二〇〇二年」、四〇—八二頁。

二〇〇三「臨淄齊国故城の西周期遺存の背景」『亞洲学誌』第二号「二〇〇三年」、三八—六七頁。

二〇〇二「商至春秋時期中原地区青銅車馬器形式研究」『古代文明』第一卷、北京大学中国考古学研究中心、二〇〇二年四月、一八〇—二七七頁。

山東省博物館 一九七二「山東益都蘇埠屯第一号奴隸殉葬墓」

『文物』一九七二年第八期、十七—三〇頁。

一九九一「山東省博物館藏品選」山東友誼書社、一九九一年五月。

山東省文物考古研究所 一九九九「山東省文物考古工作五十年」『新中国考古五十年』文物出版社「編輯・出版」、一三三—一四六頁。

山東省文物考古研究所、青州市博物館 一九八九「青州市蘇埠屯商代墓地發掘」『海岱考古』第一輯、張学海「主編」、一九八九年九月、山東大学出版社、濟南、二五四—二七三頁。

山東省文物管理處、山東省博物館 一九五九「山東文物選集 普查部分」文物出版社、一九五九年九月、北京。

寿光県博物館 一九八九「寿光県古遺址調査報告」『海岱考古』第一輯、張学海「主編」、一九八九年九月、山東大学出版社、濟南、二九—六〇頁。

白川静 一九七四「羌族考」『甲骨金文学論集』白川静、

朋友書店、一九七四年三月、京都、五五—六九三頁。

鄒衡 一九八〇「夏商周考古学論文集」文物出版社、一九八〇年十月、北京。

二〇〇〇「天馬—曲村 一九八〇—一九八九」科

学出版社、二〇〇〇年九月、北京。

鈴木敦 一九九一「殷後期における大墓の系譜」『博古研究』第二号、二七—五三頁。

一九七二「概述近年來山東出土的商周青銅器」

『文物』一九七二年五期、三一—八頁。

関野雄 一九四二「齊都臨淄の調査」『考古学雑誌』第三

二卷第四・六・一—一号「一九四二年」。後に下掲論考二四—三二五頁に再録。関野雄「中国考古学研究」東京大学出版会、一九五六年七月、東京。

陝西省考古研究所 一九九五「高家堡戈国墓」三秦出版社、

一九九五年六月、西安。

譚其驥 一九八二「中国歴史地図集」地図出版社、一九八

二年一〇月、上海。

中国社会科学院考古研究所 一九八〇『殷墟婦好墓』文物出版社、一九八〇年十二月、北京。

一九八四『新中国の考古発現和研究』文物出版社、一九八四年五月、北京。

一九八五『殷墟青銅器』文物出版社、一九八五年二月、北京。

一九八七『殷墟発掘報告 一九五八一—一九六一』文物出版社、一九八七年十一月、北京。

一九九八『安陽殷墟郭家莊商代墓葬 一九八二年—一九九二年考古発掘報告』中国大百科全書出版社、一九九八年八月、北京。

中国社会科学院考古研究所安陽工作队 一九七九—一九六九—一九七七年殷墟西区墓葬発掘報告『考古学報』一九七九年第一期、二七一—二四六頁。

中国社会科学院考古研究所山東工作队 二〇〇〇『山東滕州市前掌大商周墓地 一九九八年発掘簡報』『考古』二〇〇〇年第七期、一三一—二八頁。

張学海 一九八九『論四十年來山東先秦考古的基本收穫』『海岱考古』第一輯、張学海〔主編〕、一九八九年九月、山東大学出版社、濟南、三三五—三四三頁。

董同龢

一九四四『上古音韻表稿』中央研究院歷史語言研究所、一九四四年十二月、李莊。

西江清高

一九九三『西周式土器成立の背景（上）』『東京大學東洋文化研究所紀要』第一二一冊〔一九九三年三月〕、一一—二六頁。

一九九四『西周式土器成立の背景（下）』『東京大學東洋文化研究所紀要』第一二三冊〔一九九四年二月〕、一一—一〇頁。

浜田耕作

一九一八『泉屋清賞』。

林巴奈夫

一九七二『中国殷周時代の武器』京都大学人文科学研究所、一九七二年二月、京都。

一九七六『西周金文に現れる車馬関係語彙』『甲骨学』第十一号、日本甲骨学会、一九七六年六月、東京、六九—九六頁。

一九八四『殷周時代青銅器の研究 殷周青銅器綜覽の一』吉川弘文館、一九八四年二月、東京。

平勢隆郎 一九九六『西周紀年曆日と觀象授時曆』『中国古

代紀年の研究』平勢隆郎、汲古書院、一九九六年三月、東京、表Ⅲ。

北京大学歴史系考古教研室商周組 一九七九『商周考古』文

物出版社、一九七九年一月、北京。

方輝 二〇〇〇『明義士和他的藏品』山東大学出版社、

二〇〇〇年六月、濟南。

馬得志、周永珍、張雲鵬 一九五五『一九五三年安陽大司空

村發掘報告』『考古學報』第九冊〔一九五五年〕、

二五一—九〇頁。

松丸道雄 一九八〇『西周青銅器とその国家』松丸道雄〔編〕、

東京大学出版会、一九八〇年六月。

武者章 一九八九『先周青銅器試探』『東洋文化研究所紀

要』第一〇九冊〔一九八九年三月〕、一五五—一八四頁。

山口県立萩美術館・浦上記念館 二〇〇〇『シリーズ山東文

物3 磁器の誕生——原始瓷器——』山口県立萩

美術館・浦上記念館〔編集・発行〕、二〇〇〇年一

〇月、萩。

楊寬 一九四一『中国上古史導論』『古史弁』第七冊

〔一九四二年六月〕、上編、六五—四二二頁。

容庚 一九四一『商周彝器通考』哈爾燕京學社、一九四

一年三月、北平。

羅西章 一九九五『北呂周人墓地』西北大学出版社、一九

九五年十二月、西安。

洛陽市文物工作隊 一九九九『洛陽北窯西周墓』文物出版社、

一九九九年四月、北京。

李零 一九九二『蘇埠屯的〈重沓〉青銅器』『文物天地』

一九九二年第六期、四二—四五期。

盧連成、胡智生 一九八八『寶鷄強國墓地』文物出版社、一

九八八年十月、北京。

《英文》

BAGLEY, Robert, 1999, "Shang Archaeology," *The*

Cambridge History of Ancient China, Cambridge:

Cambridge University Press, pp. 124-231.

CHANG, Kwang-chih [張光直], 1980, *Shang Civilization*,

New Heaven and London: Yale University Press,

1986,

——— *The Archaeology of Ancient China* (4th ed.),

New Heaven and London: Yale University Press.

- DRAKE, Frederick Sequier [林仰卪], 1939/40, "Ancient Pottery from Shantung," *MONUMENTA SERICA-Journal of Oriental Studies of the Catholic University of Peking*, pp. 383-405.
- RAWSON, Jessica, 1999, "Western Zhou Dynasty," *The Cambridge History of Ancient China*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 352-449.

追記：資料調査・現地踏査に当たっては、山東大学歴史文化学院考古系・山東省文物考古研究所・寿光市博物館・青州市博物館・中国社会科学院考古研究所・北京大学考古文博院・明治大学考古学博物館からさまざまな便宜をはかっていただいた。また、構想から脱稿に至るまでの間、林巳奈夫・松丸道雄・賈效孔・松崎つね子・吉田恵一・武者章・西江清高・平勢隆郎・許宏・曹音の諸先生を始めとする多くの方々からご教示をいただいた。諸機関および各位に対し、謹んで御礼申し上げたい。

なお本研究は、財団法人高梨学術奨励基金の平成十五年度研究助成による成果の一部である。

追記二：本稿が校正段階に入った後、新着雑誌を整理した際に錢益匯氏の「斉文化的考古学発現与研究」（『中原文物』二〇〇四年第一期掲載）を読むことができた。錢氏は当該論考にて、今日までの斉をめぐる考古学研究の歴史を総括し、多くの示唆に富む指摘を行っている。拙稿と併せて参照していただければ幸いである。